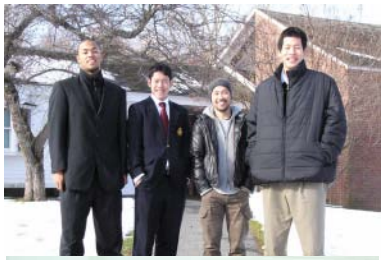
2期生　谷口大智・早川ジミー
3期生　矢代雪次郎

Daichi Taniguchi／Jimi Hayakawa／Yukijiro Yashiro

アメリカ生活レポート

谷口・早川レポート
ビジネスジャンプ新年4号（2010年1月20日発売）より

宮地陽子●取材・文・撮影
text & photo by Yoko Miyaji



2009年4月に奨学金2期生として米国（コネチカット州）サウスケント校に留学した谷口、早川の両選手。11月には待望のバスケットシーズンが始まった。同12月上旬、同校はクリスマスを迎え、一足早く雪景色を迎えていた。二人が出場する公式戦ホームゲームを、奨学金主宰者の井上雄彦氏と2010年春から渡米予定の3期生矢代選手が訪れた。

米コネチカット州にあるサウスケント校のキャンパスは、前日に降った雪が芝生を埋め、一面銀世界だった。2009年４月からこの地に留学してきたスラムダンク奨学金２期生の早川ジミーと谷口大智は、凍るような北風に「今までで一番寒い。」と震えていた。
とはいえ、厚いコートに雪道用のブーツと、さすがにこの地の冬に向けての防寒対策は万全だ。
ブーツは日常品を買い出しに行くウォルマートで買ったのだという。
「足下は写真には写さないでくださいよ。」とリクエストが入る。人の目も気になる19歳である。

関西出身の谷口と、横浜出身で福岡の高校に行った早川。
二人とも、さすがにこれだけの雪や寒さは日本では経験したことがないと言う。
日本で経験したことがないのは、寒さや雪だけではなかった。
留学してから早くも半年が過ぎ、９月からは、待ちに待ったチーム練習が始まった。
今シーズンのチームは早川と谷口の２人を入れて12人。
日本では常にチームで一番長身だった谷口（199cm）でも、このチームでは彼より背が高い選手が２人いる。早川（189cm）にいたっては、小さいほうから数えて４番目だ。
「日本でセンター的なポジションをやっていて、ガードはやったこともなかった。」と早川。
それでも、アメリカでバスケットボールをやるためには、日本で慣れたインサイドではなく、ガード、あるいはスモールフォワードとして外まわりのプレーをする必要がある。
「自分的には違和感はないんですけれど、かといって、みんなのように余裕をもってできているわけでもない。ましてこっちはレベルもスキルも高いから、その中に入っていくのは難しいです。」と、悩みを告白した。11月14日のシーズン緒戦、チームは93対79で勝利をあげたが、谷口も早川も、ベンチに座ったままで最後まで出番がなかった。
「試合にまったく出なかったのは初めてですね。かなりへこみました。」と谷口は言う。チームで谷口と同じパワーフォワードのポジションの選手はほかに２人。その２人を超えないことには出番はない。

それでも、運のいいことに谷口には間もなくチャンスが回ってきた。２試合目、ほんの数分間の出場時間だったが、その間にノーマークのシュートを決めることができた。長身の割に外からのシュートも決められるというプレーの幅の広さがコーチにも認められ、３試合目、４試合目と少しずつプレータイムが増えた。
そして５試合目以降は出場停止や怪我の選手のかわりにスターターで出場する機会が巡ってきた。
「怪我したやつには悪いですけれど、自分はそのチャンスを生かそうっていう感じです。」と谷口は言う。
ジェファーソン・ヘッドコーチからは、よく「プレーがソフトだ。」と指摘されるのだという。
「リバウンドや当たり合いに関してはまだついていけないところがある。それでも、最初に来たときからしたら気持ちも変わったし、やってやるぞっていう感じにはなるんですけれど、こっちの人たちからしたらまだソフトなのかもしれない。」と谷口。しかし“ソフト”の評価を覆すべく激しく当たっていくと、今度はファウルを取られてしまう。まだその境目がつかめずにいた。

アメリカ生活レポート

谷口・早川レポート
ビジネスジャンプ新年4号（2010年1月20日発売）より

一方で早川は、シーズンが進み、12月になってもまだ悩み、苦しんでいた。シーズン前には、アメリカの強豪校で、自分をどうやって出したらいいのかに悩んでいた。「何かで認めてもらわないといけない。何かで一番になろう。」と決心し、夏の間にトレーニングに力を入れ、その結果、シーズン初日の体力測定では、ベンチプレスでチーム一番になることができた。

「その部分は自信にはなっているんですけれど、やっぱりバスケはアメフトでもラグビーでもないから、身体だけでかくてもどうにかなる世界ではない。」と早川は言う。「ボールを使ったり、スキルが必要とされるし、その部分が自分で何が足りないのかを確かめていかなきゃいけない。」

コーチからは、「自分のポジションを見つけろ。」と言われていたが、その言葉が何を意味するのか、何をどうしたらいいのかわからずにいた。

試合では、まったく出番がないかと思うと、終盤のファウル要員として、あるいは、試合終盤のディフェンスだけ出るといった起用のされ方で、なかなか自分のリズムをつかめずにいた。元々の持ち味であるハッスルプレーも、試合では発揮できていなかった。

「高校一年のときにも、中学との違いで辞めそうになったことがあったんですけれど、そのときは自分が下手だと自覚していた。今は、ここに来て、自分でそこまでできていないわけじゃないのに認められていない。だから、こっちのほうがショックが大きいです。」と言う。そのことで悩んでいるために、勉強にも身が入らず、友人から話しかけられても邪険にしてしまう自分にさらに嫌気が差すのだという。

二人の前に壁となっているのは、アメリカのバスケットボールだけではなかった。アメリカで大学に行くためには、成績を上げなくてはいけない。その壁は、バスケットボールの壁とは別に高く存在していた。

そんな悩みを抱える２人に、井上雄彦氏がある人のメッセージを伝えた。かつてアメリカ留学で苦労した経験がある田臥勇太からの伝言だった。

「どんなことでも、すべての経験が財産になる。今を大事に頑張ろう。」

まるで、今の二人の現状や悩みを知っているかのような言葉だった。井上が代筆して紙に書かれたこのメッセージは、二人にそれぞれ手渡された。

「そうですよね。あの人（田臥）も試合に出られない経験とかたくさんしていますからね。」と早川が言うと、谷口も「グサっと来ます。すごくいい言葉ですね。大事に取っておきます。」と、感謝した。

それにしても、日本に残っていればしなくてもよかったような苦労を経験し、悩みを抱え、大きな壁に直面し、今、二人は何を思っているのだろうか。アメリカに来なければよかったと思うこともあるのだろうか。

「日本の大学に行っていたらどうだったかというのは、たまに考えます。でも、日本の大学に行っていたらセンターしかできていないんだろうなって、いつも、最終的にはそこにたどり着きます。」と谷口。日本にいる元チームメイトの活躍が気になるときもあるというが、それでも「自分の夢は日本に残ることじゃないので、こっちで経験できることが大きい。」と言う。

一方、早川は、「この奨学金はアメリカに行きたいと思って応募する人が多いと思うんですけれど、夢と現実は違うっていうのが自分の現実ですね。」と言う。とはいえ、それだけ「現実」に直面しながらも、アメリカに来なければよかったと思うことはないと断言する。

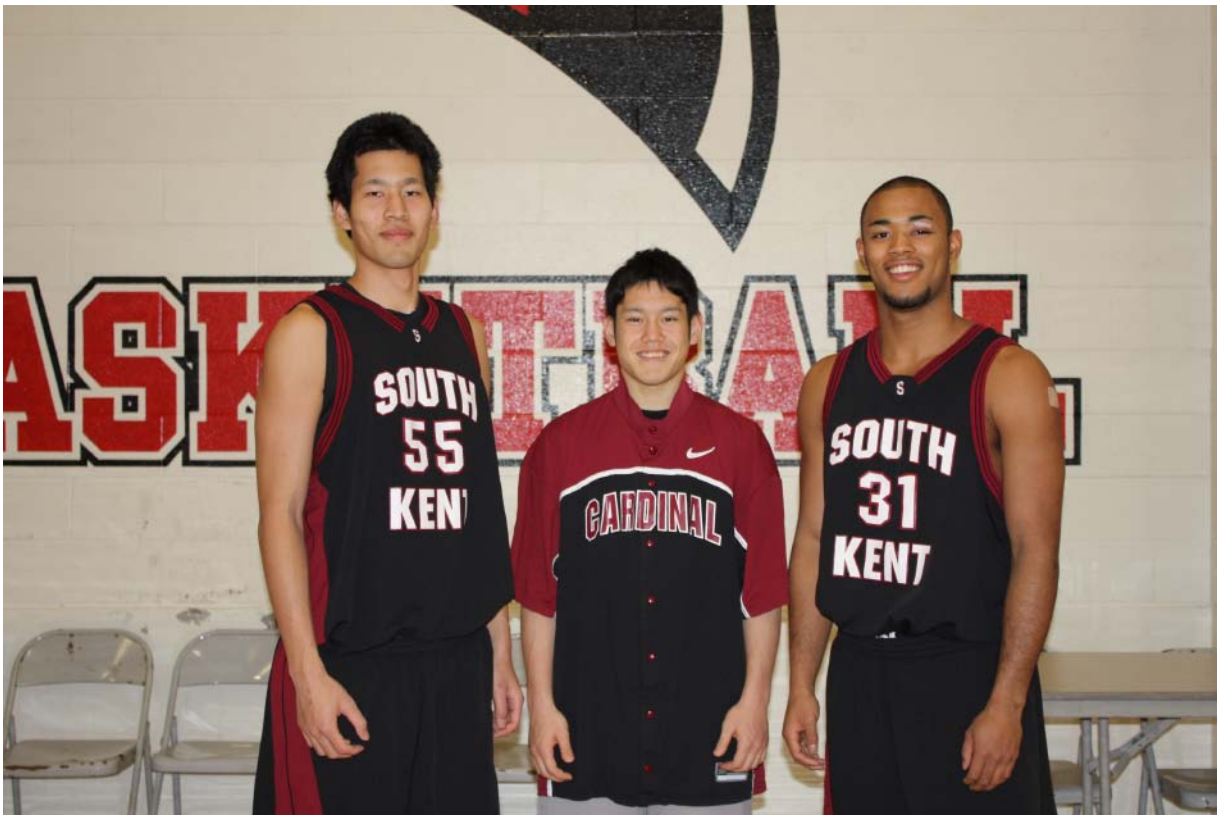
「これを超えたらもうちょっと大きくなれるんじゃないかなと思ってます。そこは、唯一のプラス面ですね。」と早川。さらに「どうしてもアメリカの大学に行きたい。もしもアメリカの大学に行けなかったら、今起きているどんなことよりも、本当にショックがでかいと思う。それだけは逃したくない。」と加えた。

サウスケントでのバスケットボール・シーズンは残りあと２ヶ月。
その後３ヶ月で留学の期間も終わる。
今を大事に――。田臥からのその言葉を胸に、２人は改めて壁に向かっていく。

アメリカ生活レポート

矢代レポート
ビジネスジャンプ新年4号（2010年1月20日発売）より

2009年12月上旬、スラムダンク奨学金３期生、矢代雪次郎がサウスケントを訪れた。
まるで彼を歓迎するかのように、到着した夜に大雪が降ったが、そのせいで印象が悪くなることはなかった。
「とても過ごしやすくて、いいところだと思いました。バスケと勉強に集中するにはすごくいい環境だと思います。寒いのも気にならないです。体育館はＴシャツでいられるぐらい暖かいですし。」と、嬉しそうに語った。
　サウスケントに行く前は不安が大きかったのだというが、実際にチーム練習に混ざったときには、そんな不安も見せず、まるでずっとチームの一員であるかのように堂々とプレーしていた。
「あの場にいたら、とにかく楽しくてしかたなかった。もっと英語でコミュニケーションを取れたらいいなって思いましたし、もっと自分を出せたらいいなって思ってました。」

　練習前、各自でシュート練習をしていたときには、チームのエース、ＪＪ・ムーアに１対１を挑んだ。
「自分、友達になりたいんですよ。でも、やっぱり言葉ではなかなかコミュニケーションが取れないので、どんどん、ああいうコミュニケーションを取っていきたいなと思います。」
　激しいブロックアウトなど、日本との違いに驚いた面もあったが、その一方で、楽しくプレーができたことで、当初の不安は消えたという。
「彼らは運動神経がものすごくて、自分は彼らのようにはなれないですけれど、どうにか対抗していきたい。
ドライブがどれぐらい通用するのかと思って、やって１本決められたので、そこはすごい自信になりました。
ディフェンスにもタイトに当たられたんですけれど、それでも慌てずにやればそこまでやられないかなと、ポイントガードとして自信がつきました。

留学後の目標はアメリカの大学でバスケットボールを続けること。
「こんなチャンスは誰にでもあるわけではないので、このチャンスを絶対にものにしたいと思っています。」